編集にあたって

猪口　進

昭和六十二年は、徳和紡績株式会社が旧満州に誕生してから五十周年に、また、敗戦後、神奈川県川崎市に再建された徳和紡績が解散して三十周年目に当ります。また、故武富吉雄社長の三十三回忌という、まことに意義深い年でもあります。

このめぐり合せの年に『徳和』の後編を、多くの方々の御協力のもとに発行できますことを深く感謝し、皆さんと共にこの慶びを分かち合いたいと思います。

旧満州の徳和は、カタン糸製造工場として発足しました。当時の国策に沿って徳和は被服関係のあらゆる部門に進出し、大東亜戦争の軍需産業工場として発展しました。最後には日本製飛行機製作工場も建設していましたが、これは敗戦と同時に中止となりました。

我々「徳和」の仲間は、この戦争で兵役に召集され出征した人、ソ連の参戦により戦死された方、シベリアに抑留され長い間酷使された人などなど、生き残った者は千変万化の言語に絶する苦難の道のりをたどり、すべてを失い、こじき同然の姿で帰国し、それぞれの郷里に四散していきました。

「こんなことで死んでたまるか」と、筆舌に尽くしがたい屈辱と艱難辛苦に耐えて生き続け、引き揚げ途中ではさまざまな苦労も乗り越えて、ようやくたどり着いた故国は、どこもかしこも瓦礫の山と焼け野原、いかに米軍の空襲がひどいものであったかということを身にしみて感じました。

昭和二十一年十二月中旬、徳和はこれからどうなるのかと、一縷の望みを抱いて大阪出張所の田附ビル徳和紡引揚事務所を訪ねました。そこは引揚者の落ち着き先を記入するにとどまるだけで、徳和紡の存在は完全に消滅していました。当時、職を失った引揚者の就職は大変に困難な状況で、ある者はやみ市で働き、食わんがためにはカツギ屋をはじめどんな仕事でもせねば生きていけない世の中となっていました。

私が日本における徳和の再建を知ったのは昭和二十三年一月でした。しかし、再建とはいうものの、芝罘から一番早く引き揚げられた人たちや復員（兵役）の早かった人たちが、武富吉雄氏を頭として私財を投じての零細企業のカツギ屋より始め、金になる事なら何でもするといったいわゆるやみ屋稼業であったと聞きました。

したがって、昭和二十六年八月川崎市溝ノ口に徳和紡績株式会社が再建されるまでの道のりは、他人には想像もできぬほどのそれはそれは苦しいもので、これに参加した人たちは、体だけをただ一つの資本として、家族とともに全力を尽くし、一心同体となってこの再建を目標に邁進されたのであります。

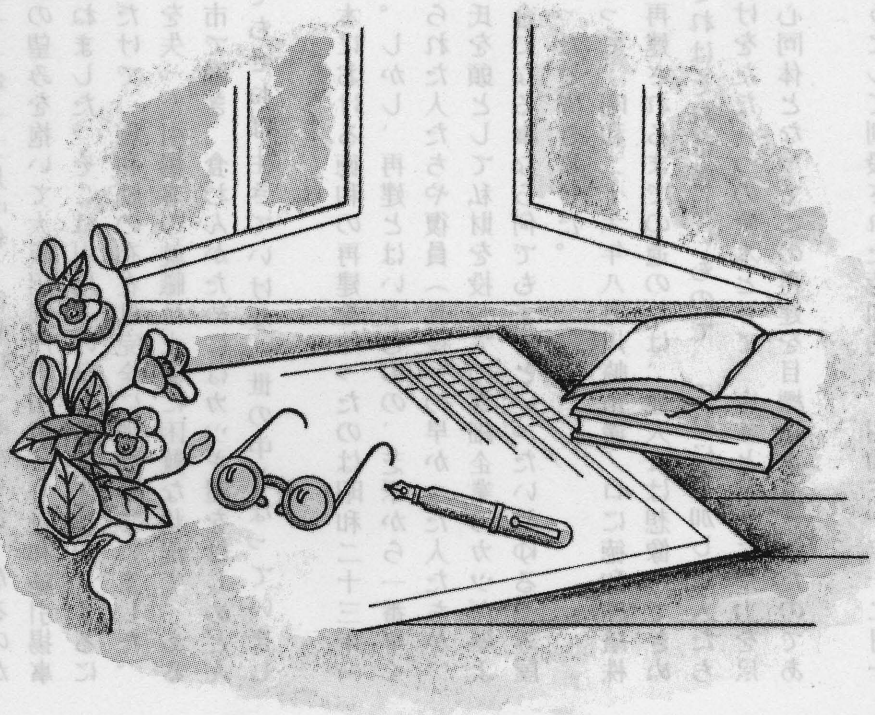
このようにして創設された徳和紡も、昭和三十年十二月十六日、不幸にして唯一の頼りであった武富社長の急逝に加え、紡機過剰設備による操業短縮と設備の増設禁止令によ

り、先行きを見越して昭和三十二年六月工場解散の浮目を見てしまいました。

このような多難な過程で、全国に四散した昔の仲間の、かっての徳和の記録を後世に残すため、この仕事を始めたのは昭和六十年一月早々でありました。これに賛同された方々からのご寄稿により、昭和六十一年十月、第一編は『徳和』（満州編）として刊行しましたが、その中には敗戦というかってない歴史の大惨事についての貴重なる体験があり、これは人類にとって終生忘れてはならないものであると信じ、私はこの後編の編集に全力を尽くし取り組みました。

それに昭和六十年十二月六日、瓦房店を偲ぶ徳和紡の大阪集会という、まさにドラマの如き再会となり、続いて六十一年の熱海大会を経て、六十二年の鳥羽大会と進み少しでも多くの資料収集に努めました。

ここにでき上がったものは皆、当時の生の記録であり、文章の上手、下手は別として、この真実を後世に残さんがための筋書きのないドラマであると私は思います。

この僅か二冊（数百ページ）の『徳和』をまとめるに当り三年の長い年月を要しましたことは、一人でも多くの方々にご寄稿をお願いし、また、当時の写真を一枚でも多く集めたい一心で、あらゆる努力をいたしました。

本書をまとめるに当り、ご協力いただいた方々に対しまして心から厚く御礼申し上げます。